
流れ星の願い：零・ZA・音編

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星の願い：零・ZA・音編

【Zコード】

Z5382A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

流れ星に願い事をすると一日だけ願いが叶う…。どこかで聞いた噂…それが現実に起こる事になるとは…。猫のミーアと飼い主のタルトに起こった不思議な出来事。

(前書き)

グループ小説第二弾！「グループ小説」で検索すると第一弾の小説も読めます。他の先生方の小説もありますので、是非読んでみてください。

星が一つ流れしていく。

星さん…私の願い、叶えてください。

大好きなあの人と…お話がしたいのです…。

どうか…私の…願いを…。

叶えて…

* * * * *

「クルトッ！ 最近、事故多いから事故んなよー！」

「気をつけて帰れよお～」

「ひやひやひや！ 僕は最高だあ

手を振りながら帰っていく、うるさい連中を見送り…

「お前等こそ、気をつけて帰れよ」

俺は一人反対に歩いていた。

酒の入った身体に、吹き抜ける夜風は妙に気持ちいい。

友達連中と、訳のわからない宴会をして気付いたら日が変わっていた。

それぞれ明日は学校なので、早めに切り上げる事になつた。

まあ…高校生が酒を飲むのはいけない事だが…。

街灯が照らす薄暗い道を、家に向かい歩いて帰る。家には誰も待つて…

「そりいえば…あいつの飯、用意したっけ…」

一人…いや一匹、俺の帰りを待つのがいた。こいつは、妙に女の子した顔の可愛い奴。

なんとも可愛いらしい声で鳴いている。

俺は、結構好きなんだが…どうにもそばに寄つて来てくれない。そのくせ、俺が近づかないと寂しそうに鳴くんだよな…。近づかせてもらえないけど…

俺の大切な家族なんだ。

「はあ…帰つたら、可愛い女の子に『おかえりい〜』とか、言つてほしいもんだ」

どうやら、俺も親父の仲間入りみたいだ。変な妄想が頭に浮かんできた。

頭を振り、妄想を追い払つて帰りを急ぐ。お姫様のご機嫌が悪くなつては大変だからな…。

気付けば、いつの間にやら家の前。そんなに急いだつもりはないが、無意識に早く帰つたみたいだ

酔つたために、帰宅途中の記憶がなくなつたわけではないようだな。…と言つうかそう願いたい。

目の前にどつしり建つ一軒家…見栄えはいいが、中身はオンボロ…。築云十年…いつ取り壊しになつてもおかしくない物件。

それが我が家で、マイホーム。ズボンのポケットから鍵を取り出しどアノブに挿しこみ廻す…。

「ありや……閉まつた？」

ノブを廻すが開かない。もう一度、鍵を挿しこみ廻す。ゆっくりとノブを廻すと……開いた。

おかしい……確かに、出て行く時に鍵は閉めたはずだ。それが何故、開いている？

第一、俺は今現在、一人暮らしだ。だから誰かが鍵を開けると言つことは無いはずだ。

今は誰も家にはいない。両親は可愛い息子を置いて愛の逃避行……もとい、旅行中。

未だ、ラブラブだから手におえない。

それに合鍵を持つている奴なんて家族以外いない……彼女もいない……言つて寂しくなつてきた。

「取り合えず……侵入しますかあ」

我が家なのに侵入とは、これいかに……と自分でツツコミながら、物音をたてずに入つていく。

玄関を入つて気付いたが、確かに誰かいる気配がする。それに明らかにいる証拠がある。

「電気……ついてる」

消し忘れではない！俺はちゃんと消して出た。これでも僕約家でちよつとは有名な俺。

決して、ケチではないので誤解の無いように……と誰に言つてるんだ？俺は……。

そんな事はどうでもいい……今は、俺の家に不法侵入している不届き者を成敗する方が先だ！

そろりと足音を消し……気配を消し、電気の付いてるリビングへと向

かつ。

そりいえば、我が家の可愛いあの子はどうした！
まさか、いたいけなあの子にあんな事やこんな事をして… 許さんぞ
！お父さんは許さんぞ！

「おー」「ラララ…なんじゃワレはあー！」

「はうひー…」

リビングに飛び込み、思いきり叫んだ俺の耳に届いたのは何とも小さな悲鳴だった。

「女の…子…？」

「はう…あ、あああ、あの…その…」

長く綺麗な黒髪と少し切れ長の瞳。スッとした鼻と赤く艶のある唇。年頃なら、俺より少し下…。

すじく…とても泥棒には見えない、可愛い女の子がリビングに座っている… ていうか腰抜かしている。

俺を見てかなり動転してるのが、オタオタと目が…身体が泳いでいる。

「えつと…」

「「「、「めんなさいー」」主人様」

「……………はつ？」

しばしつリーズ…。なんだ…この子…その、かなり痛くて可哀相な子か？

俺は、メイドさんなんて持つた覚えはないぞ。それにアブナイ趣味はない。

…と言づか、そもそも…誰だ？

「あの…」

「は、はいっ…何でしちゃ…」じゅ…

段々と語尾が小さく聞こえなくなっていく。少し俯き加減に、顔を染めて話す仕草は、俺的にはストライク！

モジモジと指を突き合わせている姿は…最高です！

「すいません…どちら様で？」

「あ、あの…私、ミーア…です。あなたの…飼い猫のミーア…です」

「……………へつ？」

再度フリーズ。今何と言った?ミーア?…俺の飼い猫のミーアってあのミーアか!

「マジで…?」

「はい…そうです。ご主人様」

俺を見て恥ずかしそうにニッコリと微笑む顔はとても可愛かった。確かにそうなのかもな…。

もしかしたら、まだ俺酔っ払っているのか…。

でも、確かにミーアだ…あの笑顔はどことなく見覚えがあるような気がする。

「…ほんとにミーア?」

「はい…本…当…です。…」ご主人様の…その…秘密も…しつてますから

モジモジしながら、顔を真っ赤にして言つミーア。試しに聞いてみたら、間違いなくミーアでした。

それは、誰にも言つていらない事…ミーア相手に話した俺の悲しい恋の話。本物だ…確かにこいつはミーアだ。

「それで…えつと…なんで人間になつてるんだ?」

「あの…えつと、その…流れ星」

「……………流れ星?」

あの、お空を流れ落ちてくる…あの流れ星の事か?それが何の関係があるんだ?

「その…流れ星にお願い…すると、一つだけ…願いが叶うって…教えてもらつた…ので…」

「それで…人間になつたと…言つ訳か」

「クリと頷くミーア。未だに顔が赤い…というか怯えている?…もし

かして、こいつ…俺が怖い？

試しに近づいてみる…。するとどうだー逃げられた…ちょっとショック。

「あの…その、『ごめんなさい』『主人様の事…』

「…いいよ。それ以上は言わなくても…」

そつか…俺、嫌われてたんだ。だから、俺が近づくと逃げてたんだな…。かなりショック…立ち直れないかも…。

こんなにも俺は好きなのに…悲しくてミーアが震んでみえるぞ。…マジで涙が出てきた。

「ち、違います！その…恥ずかしくて…だから、えっと…その…私

…」

「あの…ミーア…さん？」

思いつきり手をバタつかせて俺を見ているミーア。ワタワタと動く姿は、なんとも可愛らしい…お兄さん食べちゃうぞ。

…はつ…い、いかん！妄想の世界にレッツゴー しけけたぞ。恐るべし…猫娘ミーア。

「は、はいっ！何ですか！』『主人様っ！」

スチャつと、その場に正座をして俺を見つめるミーア。顔はとにかく赤い…そんな顔で見られると何とも恥ずかしい。

「いや…俺はどうしたらいいんだ？」

「えつと…分かりません…私には…ここは、『主人様の家…ですか

…』

首を傾げて困り顔で、俺を見ているミーア。切れ長の瞳が真っ直ぐ俺を射抜いている。

できれば、俺を見るたびに顔を赤くするのは止めてくれないかな…こっちも恥ずかしいぞ。

「そりゃそうだ…ここは俺の家だ」

「えつと…それよりも…ご主人様」

「んつ…なんだ？」

改まって俺を見つめて、三つ指ついて…お辞儀をするミーア。

一連の動作にまつたく無駄がなく、優雅に見えた。

「おかえりなさいませ……」主人様

そう言つて顔をあげるニアは笑顔だった。瞳には優しく笑みが現れていた。

「えつと……その……た、ただいま」

「はいっ」

それも飛びつきりの笑顔、最高に可愛い。とても猫だったとは思えないこの仕草。

「それでは、どうされますか？」

「はつ……？ 何が？」

また顔を赤くして、モジモジするニア。一々、可愛すぎるの…お前は…。

「あの…お風呂か…それとも、もつ…お休みになるのか…と思いまして」

「…ああ…そうだなあ。どうするかな…風呂にでも入つてくるかな…なんだ…この微妙な会話は…。はつ…そうだ…まるで、新婚さんいらっしゃ…違つた。新婚さんじゃないか！」

「は、はいっ…そ、それでは…」一緒に…

「はつ？…今、何と言つた？」

だから、顔を真っ赤にしてモジモジしてると俺が大変なんだが…。理性保つか…心配になつてきた。

「……」一緒に…します。…お背中…流させてください…！」

胸の前で小さく拳を握つてゐるその姿は、とても愛らしくいが言つてゐる事はぶつ飛んでいる！

「ぶつ…ちよ、ちよと待てえ。それは嬉し…じゃなくて、ダメだ！」

「な、なんですか？…いつも一緒にないですかあ。わ、私は恥ずかしいですけど…頑張ります！」

「頑張らんでいいっ！そこで待つてろ！」

俺は慌てて風呂場に駆け込み鍵を閉めた。扉の向こうでは、ミーラの悲しそうな声が聞こえている。

俺…何か悪い事してる？いや…間違つてないはず…猫の姿ならとにかく、人間の姿は非常にまずい！

精神衛生上まずいっ！これでも、健全な高校生…女の子の身体に興味は…って、猫相手に何考てるんだ！俺は…。

冷水を浴びて、心頭滅却…寒い…風邪引きそうだ。早くあがろう…。そそくさと着替えた俺は、風呂場を後にした。

風呂を上がった俺を待つてましたと言わんばかりに寄つて来るミーア。

パタパタと可愛らしい音の足音を響かせてやってくる。

「『』主人様…酷いですぅ…折角、一緒に入ろうと思つて…覚悟を決めていたのに…」

涙目で俺を見てクスンと鼻をならしてミーラーに、とてつもない罪悪感と後悔の念を持つてしまつ俺…。

薄つすら赤い頬は、なんともおいし…じゃなくてだな！覚悟つてなんだ！俺はもしかして…とんでもない間違いをしたのか！それなら…ちょっともつたいいない…。

「そ、それでは…もう…お休みになられますか？」

「えつ…いや…もう少し起きてるよ」

「そうですか…それでは、私もお付き合いでします」

そういうてパタパタとリビングに入つていくミーラー。その後姿を見ながら、俺も後について入つていく。

いそいそとキッキンを動き回つてこむミーラーが、何かを用意してくれているみたいだ。

しばらくして、トレイに何かを乗せて現れミーラーは、少し危なから手つつきでテーブルの上にカップを置いていった。

「どうぞ…少し熱いかも知れません」

「ありがと…」

湯気の出ているそれを口に含む。香りが口の中に広がり爽やかな気分になつていく。

こんな家のあつたか？俺は知らないぞ…親父か、お袋の秘蔵の品つてやつかな？

「これ…なんだ？」

「紅茶です…銘柄はよく分かりませんが…キッチンにありました」そう言つて息を吹き掛けながら、恐る恐る飲んでいるミーア。そつか…ミーアは猫だから熱いのはダメなんだ。

必死になつて冷まそうとしているので、顔が少し赤くなつて…「…どこまでも可愛い奴だな…」

「ミーア…無理に飲まなくて、冷めてから飲んだ方がよくないか？」
「えつ…いえ、あの…」主人様と同じものが…飲みたくて…その

…」

両手でカップを持つて俯き加減で話すミーア。その顔は、また赤く染まつていた。グッジョブ！ナイスだ…ミーア！

そこまで、俺と一緒にがいいとは…見上げた飼い猫精神。それならば…誓めてやろう。

「ひにゃ…あの、えつと…」、「主人様つ…」

「んつ…ああ、ごめん。嫌だつたか？」

真つ赤な顔を高速で横に振るミーア。なんか文字が見えるペンを思いで出す…。

頭を撫でて…いるだけなんだが…それが、どうにも恥ずかしいみたいだ。キヨロキヨロと目が泳いでいる。

なるほど…ミーアさんは恥ずかしがり屋さんなんだね…。

「そつか…」

「はにゃ…」、「主人様」

幸せそうな顔で、うつとりして…いるミーア。こうして…るとやつぱり猫なんだと思つてしまつ。

しばらく撫でていると、「トンと俺にもたれかかって来る重みがある。見れば、静かに寝息をたてているミーア。

規則正しい呼吸音が聞こえている…もつ遅い時間だ。いつもなら寝ている時間に待っていたんだ。

相当、無理していたんだろう…なれない人間の姿だし…。そつとじいてやるか…それに俺も眠くなってきた。

このまま、寝るのはまずいかな…でも、もう動くのもかたるい…。お休み…。

* * * * *

「ご主人様…私嬉しいです。

」ひして…お話できて…。

もつと、もつと…お話したかったです…。

それも…もつ…。

「ご主人様…私…。

* * * * *

身体にかかる柔らかい感触。暖かいような…それでいて気持ちのいい温もり…。

薄つすらと田を開けると、そこは見慣れたリビング。そして……見慣れた女の子……女の子！？

「つおつー！」

「あやつ……ど、どうしましたか？」「主人様」
パニックに陥つた女の子……つてミーアか……びっくりした……それじゃ、あれは夢ではなかつたんだな。

俺の上に掛けられた薄手の毛布は、ミーアが掛けてくれたんだろうな。本当に優しい子だよ……。

「おはよー、ミーア」

「あつ……はい、おはようございます。……でも、もう夜ですので、こんばんわです」

につこりと微笑むミーア。今、何と言つた？夜……こんばんわ？ゆつくりと首を廻して時計を確認。

現在八時。うん……朝だね。多分、朝だろ？……ミーアの勘違い。あいつ、朝日がサンサンと輝いて……て、おいつ！

「なんで真つ暗なんだあ！……つおい、ほんとに夜だあ！。つー事は何か？俺は一日中寝てた？」

「はい……それはもう、気持けよそいつな顔で……。可愛いかつたですよ……」「主人様の寝顔」

「ぐはつ……やつてしまつたあ」

寝顔が可愛かつたとか……今はどうでも、いや良くないが……。学校さぼつてしまつた……これでも、皆勤賞狙つてたのに……。しそうがないか……あんなに遅くまで飲んで、帰つたらミーアが人間になつていて……色んな意味で疲れたし……な。

「い、ごめんなさい……起こそうと思つたのですが……どうしても……」

「……あつ、いやミーアが悪い訳じやないから。気にするな……なつ？」
ポンッつと頭に手をおいて、撫でてやると恥ずかしそうに俯いて田を細める。

気持ちよさそうに……嬉しそうな顔をしていた。

「さて……どうするかなあ。飯でも食うか……何にも食つてない訳だし

…

「それなら、用意します。…すぐ、温めますので…ちょっと、お待ちください…っ！」

俺の元から立ち上がり行こうとしたミーアだが、少し苦しそうにうめいて胸を押させていた。

前屈みになり苦痛に顔を歪ませている。少し呼吸が荒く、とても辛そうに見える。

「大丈夫か！ミーア」

「…はいっ…大丈夫です。それでは、すぐ用意しますので…」少し汗の浮いた額を拭い、キッチンへ歩いて行くミーア。その足取りは少しおかしい。

よろよろと、危ながしい…ほんとに大丈夫か。なんだか、フラフラしているように見えるが…。

キッチンでは、動き回るミーアの姿が見える。あっちはこっちへ…手伝おうと思い声を掛けたが、丁重に断られた。

それから、しばらくしてキッチンからやつてきたミーア。用意してくれたのはカレーとサラダ。

「ありがとうございます…つーか、ミーア…お前、カレーとか食べたか？」

「いえ…私は食べれませんが、ご主人様が喜んでくれたら…嬉しいですから」

微笑むミーアの顔は少し疲れているのか顔色が悪い。やつぱり調子が悪いのか…それは人間の姿は無理がかかるのだろうか？

「冷めたら、おいしくありません…熱いうちにどうぞ」

「んつ…ああ、いただきます」

スプーンで一口、カレーをすくつて食べる。辛い…でも、それ以上においしかった。

空腹も手伝つて俺はカレーを食べ進めていた。無言で食べる俺を、ミーアは嬉しそうに見ていた。

なんかいいな…じついうのつて。いつの間にか、空になつていたお

皿を眺めながら両手を合わせて合掌した。

「『ひつじひつじ』でした」

「はい…お粗末さまでした」

お皿を持ち立ち上がるミーア。俺は本でも読もうとトーブルの上に置いてある本に手を伸ばす。

突然、キッキンの方から響く音。続いて何かが倒れる音…まさか。

「おいつ…ミーア」

キッキンまで走った俺の目に映ったのは、床に倒れこむミーアの姿。苦しそうに上下する肩…胸…。

荒い呼吸がミーアの今の状況を物語っている。倒れるミーアに駆け寄り抱き起し…して…

「ミーアー…しつかりしろ…どうした? 大丈夫か!」

「はあはあ…だい…じょ…うぶ…です」

苦しそうに…それでいて俺を心配せまいと笑顔でこたえるミーア。どうしたんだ?ミーア。

何が起きてるんだ…俺はどうしたらいい。何ができる…。

「そうだっ! 病院…」

「ダメ…ですよ。…『じゅ…じんわ…あ…私…ね』…です」

そうだった…ミーアは猫だった。普通の病院に連れて行つてもいいのか?ここは動物病院か?

「取り合えず…」

「えつ…あ…」

俺はミーアを抱き抱えてリビングに移動した。思つた以上にミーアは軽かった。

ソファにゅつくつと横にさせて俺はミーアのそばに座つた。

「どうしたらいいんだ…」

「もう…時間…なん…です」

俺を見る目が僕げに揺れていた。時間…何の事だ?

悲しそうに揺れている瞳は、何かを必死に訴えているよつとみえる。

「何の事だ?...ミーア」

「……私……昨日の夜……寂しくて……『主人様を……探しに……行つたんです』」

唐突に話しあつたミーア。声に今までの元気はなかつた。

「……えつ……ミーア?」

「こつぱつ……探して……やつと……『しおじんせめ……みつけた……です』」

段々と声が弱弱しくなつてこぐ。なんの冗談だ……ミーア。お前……どうしちゃつたんだよ……。

「うれしくて……『しおじんせめ……のそばに……こりうつ……したとき……』」

嬉しそうに……でも、悲しそうにミーアの言葉に俺の中で何かが繋がつた。

「つ……それじゃ、あの時の事故は……」

力なく頷くミーア。嘘だろ……そんな事つて……。あの時、俺は友達と遊んでいた。まだ、訳の分からん宴会をする前だ。時刻にして、午後九時頃だろつ。

その時、俺たちの目の前で事故があつた。車が何かを轢いた……と。友達が言つた。「猫だ……かわいそつと……」そう言つたんだ。だから俺も「猫か……かわいそつと……」そう言つたんだ。まさか……それが、ミーアだとは思わなかつた。

猫は……小さな声で鳴いていた。まだ……生きていたはずだ。それを俺は……俺たちは……。

「つ……うれしくて……とびだしちゃい……ました」

「ミーア……」

舌をチロチと出しあつてみせるミーア。今はそんな顔をしないでくれ。

俺は……お前を助けてやらなかつた主人なんだぞ?目の前で苦しんでいたお前を見捨てたんだぞ!

「わたし……かえらなこと……」「じゅじん……わわ……しんぱこすると……おもつて……」

「ミーアー！もういいから……喋らなくていいから……」

苦しそうに話し続けるミーアを俺は見ていられなかつた。この場から逃げ出したい……そればかりを考えていた。

どうしてこいつは……そんなに笑つていられるんだ。苦しいだひつこどつして……。

「そうしたら……ながれ……ぼしが……だから……おねがい……したんです」

「ミーア……ミーア……」

「おねがいして……きづこ……たら……こえに……いました」

「つ……ミーア」

ゆづくりと伸びてくる腕……宙を彷徨い、何かを探してくる。俺は堪らず、その手を握る。

握られた感触が伝わつたのだろう……嬉しそうに微笑むミーアを見て、俺の目から涙がこぼれていた……。

「『じゅ……じん……わわ……なまえ……よんでも……いいです……か……』

焦点の定まらない目で俺を見ているミーア。もう……俺の姿は映つてないのかも知れない。

俺を探して揺れ動く瞳に薄つすらと涙がたまつていて。

「ああ……いくらでも呼んでくれ……好きなだけ呼んでいいから……」
名前ぐらい好きなだけ呼んでくれ！だから……だから……お願いだから……俺のそばから……。

「くると……わま……わたし……しあわせ……でした」

「ミーア……そんな事言うな……」

ミーアの身体が光を放ち始める。淡い光がゆづくりとミーアを包み込んでいった。

全身を包む光は次第に細かな粒子に変つていく。そんな事言うな

！… そんなお別れみたいな事壟つな！

「く… ると… …」

次第に消えていく声。小さく小さく… 消えていく声。なあ… 嘘だろ… 嘘だつて言つてくれよ。

「……だ… い… …すき… …」

「//ーア？… おこつ… //ーア…」

そう聞こえた…。俺の手の中… 光の粒に変つてこく//ーアの手がすり抜けていく。

身体が全て光の粒子に変つて… そして、消えていった…。

俺は力なく、その場に座り込んだ…。消えていった俺の大切な…。止めどなく流れてくる涙が頬を幾筋も伝い流れ落ちる…。

「//ーアアー————！」

俺の声は誰もいない部屋に響いている。誰もいない… もう… //ーアはいない。

また… 流れてくる涙。//ーア… 俺は幸せだったよ。お前と出合えて… 本当に幸せだった。

俺はいつの間にか眠つていたようだ。重い瞼をゆっくりと開けていく。そこはリビング…。

ソファに、もたれかかるようにして寝ていたみたいだ。外は薄つす

らと明るくなっている。

もう…朝なんだ。昨日の事は夢なのか…ミーア…。そう思いたかつたが、頬に残る感覚に現実に戻される。また…涙が溢れてきた。ミーア…もう、いないんだよな?本当に…いなくなってしまったんだよな…。

ソファに突っ伏して、俺は目を閉じた。もう、いないミーアを思い出しても…。

「……ミーア」

びつじて…こんな事になってしまったんだ。あの時、俺がちゃんと助けていたら…。

みやー

声が聞こえた気がした…。もう一度と聞く事がないと思つていた声…鳴き声。

俺は立ち上がり、駆け出していた。呼ばれている…そう感じから。慌てて靴を履いて玄関を開ける。

薄つすらと明け始めた空の中、俺は走り出した。呼ばれている…導かれるように走っていた。

胸が苦しい…息がうまくできない。それでも俺は走り続けた。

「……はあはあ……ミーア」

俺が辿り着いた場所。それは…一昨日、事故があつた場所。ミーアが…轢かれた場所。

…ここにいるのか?俺はここに何を求めて来たんだ…。いるはずもないのに…何を期待して、ここまで来たんだ。

「……せまつ……俺……なに……してん……だ

崩れるよつこその場に座り込んだ。止まつていた涙がまた……頬を伝
い落ちる。

「めんな……最低の飼い主だな……俺は……本当に」「めんな……//ーア……。

「みやーー

小さく嗚べ声が聞こえた。俺の背中をくすぐる感覚。俺は慌てて後
ろを向くと……

「みやーー

一鳴きして、俺の膝の上に乗り、身体をすり寄せてくれる。その姿は
またじへく……

「//ーアー！

俺は堪らず、ミーハを抱き上げていた。腕の中こいの//ーアは嬉し
そうに……それでいて恥ずかしそうに鳴いていた。

それはまるで、「ただいま」と言つてこように聞こえた。だから、
俺は迷わず……

「おかえつ……ミーア

そう言つた俺こ、また嬉しへりて鳴べ//ーア。

一筋、また涙が流れ落ちる。

「//ーア……よかつた……」

ミーアはその瞳で俺を見ている。少し潤んだ瞳は優しく、俺を包んでいた。

夢じやない…俺の腕の中には確かな温もりがある。帰ってきた…俺の大切な家族。

「じめんな……ミーア。…もう…どこにも行かないでくれ

困ったように…でも、どこか嬉しそうに鳴くミーア。優しく頭を撫でると甘えたように目を細める。

その姿が昨日のミーアと重なる…。ミーアの腕が…手が…俺を優しく暖かく包んでいるようだ…。

「俺の大切な…家族なんだから…」

ミーアは鳴く…。その鳴き声はとても綺麗な声に聞こえた。言葉はもう分からない。でも、伝わる思いはある。

朝日が俺たちを照らし出していた。重なり合つ影…一人の影。ただ、俺たちはその場で抱き合つていた。

腕の中…確かな温もりと柔らかい笑顔のミーアが、そこにいた…。

* * * * *

私…帰つてきました。

ご主人様のそばが…一番好きです。

もう喋る事ができなくとも…。

いつまでも……お元気でいたい。

大好きです……クルト様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382a/>

流れ星の願い：零・ZA・音編

2010年10月13日19時39分発行